

す、此の頃此の街道が物騒でチヨイ／＼賊が忍び込みますので、それ／＼番人が付けてござりますが、モン賊が忍び込みましたら私の方で笛を吹きますので、皆様方も起きて居る知せに笛を吹いていただきますようにと云ふと、旅人は此處の宿屋は親切な家ぢや、此處へ五つくれ、こゝへ十をくれ、こゝは二十ぢやと仰山にあつた笛を皆分配くばつて一ツだけ残しておいて、飯を喰ふと段梯子の下の行燈部屋へ這入つて待つてると、女中が用事が済むと段梯子をトン／＼と上つて笛をパイと吹きよつたんや、男に聞へたらどむならんで私が下からパイと吹くと、女中が要助はんのじゆんさいな人わいな、下で笛が鳴つて居ると段梯をトン／＼と降りよつたら、二階の男が笛をパイと吹きよつたんや、矢張り二階かいなトン／＼と上ると下からパイ、下かいなと降りると二階でパイ、二階かいなと上ると下からパイ、さうこうしてる間に道者が眼を覺

鹽をしてゐて、こんな草深い田舎に居ると、都會へ行つたらどうやと

「誰にいな」

「金盃に」

「人間に云ふ様に云ふたんやな」

「そんなら金盃が、連れて行つてくれはるお方がおまへんね、ところ云ふね」

「誰が」

「金盃が」

「嘘をつけ」

「ほんまや、そんなら私が連れて行つたらかとおふと、兄さんお頼み申しますと云ふたんで、金盃に鑲が附いたあるのを幸ひに手拭通して首へく／＼り付けて上から引廻し合羽を着けたら解らんやろ、庭へ降りて草鞋を履いてると宿引きに出てた女中が、兄さんモウお出立かお名残惜しうおますと云ひよるので、私も二三日逗

して太郎作、甚二郎、茂左衛門、先刻番頭さんが云ふた賊が忍び込んだ笛を吹け、パイ／＼／＼、彼方からパイ／＼／＼、此方からパイ／＼／＼、女中が二階へ上つたり降りたりして段梯子から轉こんで落よつたんや、今朝見たら跛を引いてよつた」

「清やん、そんな可哀想な事をしたりないな、そらそうと源さんどう仕たんやろ」

「一ト足先きに行てくれすぐ行くと云ふてたのに」

「オーイ、清やんに喜いやん待つてんか……」

「オイ源やん來た來た／＼、早うおいでんか」

「ア、しんど……」

「源さんどうしたんや」

「今朝と云ふ今朝は、頭でケン／＼して逃げて來た」

「何んでやね」

「今朝起きて顔を洗ひに行つたら、銅のえゝ金盃があつたんで私云ふたつたんや、オイ、お前こんな立派な金

留仕て居たいが友達が先へ出たので、いづれ歸りにゆつくり泊て貰ふはと云ふたら、兄さんほどのえゝ事云ふて、必ず來とくれやすと背中をボンと殴りよつたんや、金盃が這入つたあるのでボンと鳴つたんや、兄さんの背中をたゝいたらボンと鳴りましたと云ふよつてに、お前と別れが辛いよつてに別れの鐘をつきよつたんやろと云ふてやつたら、ほんまに悪い人やはと續けて七ツ殴りよつたんや、逃げようと思ふて敷居にけつまづいたら手拭が解けて金盃がゴロ／＼と出たんや、皆來とくなはれ此奴が金盃を盗みよつたと云ふなり若い奴が五六人來て、私を蹴るやら殴るやらで謝り一札を書いて逃げて來たんや」

「ヨウ簀卷に仕て池へ投り込まれなんだ」

「私足が痛うて歩けんね」

「モウ少し辛抱し、馬に乗せたる、然し馬方なぞは目角が早いで足元を見られん様にしいや、應對萬端は私に